

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	森田 幸樹	学校名	西宮市立塩瀬中学校
教科(科目)・領域	総合的な学習の時間	対象学年(人数)	1年5組(33名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年11月～12月(6時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 世界とつながる一歩:聞く・話す・調べるを通した、本物を感じる国際交流					
2. 実践する教科・領域 総合的な学習の時間	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加		
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定)					
○生徒が JICA による国際協力の取り組みや異文化の実態について学ぶことで、世界には多様な価値観や課題が存在することを理解する。					
○兵庫県に住む海外ルーツの方との交流を通じて、身近な場所にも国際的なつながりがあることに気づき、実際の対話を通して異文化への関心や共生社会への態度形成につなげる。					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	国際協力や異文化理解に関する基本的な情報を、JICA 講座や交流準備を通じて正しく理解し、交流に向けた質問づくりや役割分担などの活動に活用することができる。			
	②思考・判断・表現	異文化や多様な価値観に対して自分なりの考えを持ち、交流の場面で相手の話を受け止めながら、自分の言葉で問いかけたり、感じたことを振り返りで表現したりすることができる。			
	③主体的に学習に取り組む態度	世界や地域の人々に関心を持ち、「もっと知りたい」「自分にもできることがあるかもしれない」と感じながら、交流準備や振り返り活動に意欲的に取り組む姿勢を示すことができる。			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】					
日本社会は今、国籍や文化の異なる人々と共に暮らす時代へと移行している。兵庫県西宮市においても、外国籍住民や海外にルーツを持つ子どもたちが地域に定着し始めており、今後、学校生活や地域活動の中で異文化と出会う機会が増えていくことが予想される。					
本単元では、JICA 海外協力隊員によるオンライン出前講座と、兵庫県国際交流員(CIR)との交流活動を中心に					

据えている。これらの実体験に基づく学習活動は、生徒にとって異文化理解の入り口となり、国際社会の中で生きる自分自身の在り方を考える契機となる。JICA 隊員からは、日本人が海外でどのように働き、現地の人々と関わっているのかを学び、CIR との交流を通じては、日本に住む外国人がどのような思いや背景を持って生活しているのかを知ることができる。これらの学びは、生徒が「国際理解」を単なる知識としてではなく、身近な人との関係性の中で実感を伴って捉えることを可能にする。

中学 1 年生という発達段階において、こうした体験的な学習は、他者への共感や尊重の姿勢を育み、共生社会の担い手としての意識を芽生えさせる上で極めて有意義である。限られた時間の授業の中であっても、実際に人と出会い、話を聞き、考えるというプロセスを通じて、生徒が自らの生活と国際社会とのつながりを実感できるよう、本単元を設定した。

【児童／生徒観】

本学級の生徒は、学校の授業や学習塾などで英語の学習には意欲的に取り組んでいるものの、海外旅行や海外での生活経験を持つ生徒はほとんどおらず、日常生活の中で異文化に触れる機会は限られている。実際に「将来海外に行ってみたくと思うか」という問いに対しても、「行ってみたく」と答えた生徒は約 2 割にとどまり、多くの生徒にとって海外や異文化はまだ遠い存在となっている。こうした実態から、生徒が身近な地域や社会の中で国際的な視点を持ち、異なる文化や価値観に対する理解を深めることが求められている。中学 1 年生という発達段階において、他者との違いに気づき、受け入れる力を育むことは、今後の共生社会を担う基礎となると考える。

【教材観】

本単元では、JICA 海外協力隊員によるオンライン講座および地域在住外国人との交流活動を実施する。教科書的知識では得られない一次的・実践的な情報に触れる機会を提供し、生徒の内面に深い揺さぶりを与える教材である。

① JICA 海外協力隊員の講座

日本人が海外で果たす役割や現地の人々との協働の実態を通じて、国際協力の意義を具体的に理解する場とする。これは、生徒が「世界における日本人の姿」や「自分が果たし得る役割」について考える契機となり、国際的視野の育成に資する。

② 地域在住外国人 (CIR) との交流

異文化が地域社会に存在することを実感させるとともに、外国人が日本で生活する上で抱える思いや背景に触れることで、多文化共生の視点を育む。生徒は「異文化＝遠い存在」という認識を転換し、身近な他者との関係性を通じて国際理解を深化させる。

これらの教材は、生徒の生活実感に根ざしたリアルな出会いを通じて、国際理解を「知識」から「経験」へと転換する役割を担う。中学 1 年生という発達段階においては、抽象的な国際問題よりも、具体的な人との関わりを通じて「違いに気づく」「共通点を見つける」「自分の考えを言葉にする」ことが重要であり、本教材はそのような学びを促進する構造を有している。生徒の「もっと世界を知りたい」「自分にもできることがあるかもしれない」という内発的動機を喚起し、将来的な進路選択や価値観形成に影響を与える「学びの原体験」として機能することが期待される。

【指導観】

本単元では、JICA 海外協力隊員による講座と兵庫県国際交流員 (CIR) との交流を通じて、生徒が「世界と自分」「地域と異文化」とのつながりを実感し、共生社会の担い手としての意識を育むことをねらいとする。指導にあたっては、以下の視点を重視する。

① 体験を通じた国際理解の促進

海外で活動する日本人 (JICA 隊員) の話を聞くことで、国際協力の現場を具体的に理解させる。
地域に暮らす外国人 (CIR) との交流を通じて、異文化が身近に存在することを実感させる。

② 異文化理解と共生意識の育成

「異文化＝遠い存在」という認識を転換し、身近な他者との関係性を通じて多様性への気づきを促す。
異なる文化や価値観に触れ、共生社会を担うために必要なことを自分事として考える力を養う。

③ 対話と振り返りによる学びの深化

一方的な知識伝達ではなく、生徒の問いや気づきを引き出すファシリテーターとして関わる。
交流後の振り返りを通じて、体験を学びへと昇華させ、次の学習や生活につなげる。

このような指導を通じて、生徒が「もっと世界を知りたい」「自分にもできることがあるかもしれない」と感じるような学びの動機を育み、国際社会における自己の在り方を主体的に考える力を培うことを目指す。

7. 単元計画(全6時間)			
時間	ねらい	学習活動	資料など
1	自分の生活(衣食住・教育)を振り返り、JICA 出前授業で交流する国の生活と比較することで、文化の違いや共通点に気づき、主体的な問いを持つ力を育てる。	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを用いて、自分の生活(朝食、住居、学校生活など)を振り返る。 「〇〇国に住むとしたら？」というテーマのもと、JICA 国際交流対象国について詳しく調べる。 日本との違いや驚きをグループで共有する。 派遣教員への質問をグループで考え、質問カードにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自文化振り返り用ワークシート(衣食住・教育のチェックリスト形式) JICA 公式サイト「出前授業」紹介ページ(対象国の情報) JICA 地球ひろば「教材を探す」より『つながる世界と日本』冊子教材(PDF)
2	JICA 派遣教員の体験談を聞き、事前に立てた問いをもとに交流することで、異文化への関心と理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> JICA オンライン出前授業を受講し、派遣教員の体験談や現地国について学ぶ。 生徒が質問カードをもとに直接質問する。 感想をワークシートに記入し、クラスやグループで共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が作成した質問カード 振り返り用ワークシート
3	兵庫県国際交流員(中国・韓国・アメリカ)との交流に向けて、文化的背景を理解した上で、交流に必要な視点や質問を考える。	<ul style="list-style-type: none"> 海外の人が兵庫県で生活する上での利便性や困り感などを予想し、まとめる。 各交流員の紹介ページを見て、これまでの背景を知る。 交流に向けた質問をグループで話し合い、質問を作成する。(質問は事前に送付しておく) 	<ul style="list-style-type: none"> 兵庫県国際交流活動紹介ページ(CIR) 西宮市国際交流協会(NIA)活動紹介ページ 西宮市「多言語生活ガイド」 JICA 公式 YouTube 「2022 年度移住史・多文化理解オンライン講座 ～歴史から『他者』を考える～」
4	国際交流員との交流を通じて、日本の文化や暮らしの魅力を再発見するとともに、外国人が日本で生活する際に直面する課題や困りごとを理解することで、多様な価値観に気づき、共生社会のあり方について考える力を育む。	<ul style="list-style-type: none"> 国際交流員のこれまでの経歴や実体験を紹介してもらい、生徒が前時に考えた質問に答えてもらう。 自分たちで立てた予想と比較することで、多様な価値観に気づく。 追加質問や交流を行う。 交流で得られた気づきをワークシート(Excel)に記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が作成した質問の一覧表 Excel ワークシート
5 本時	国際交流員との交流からの気づきを共有し、共生社会において大切なことを交流員と共に考える。	<ul style="list-style-type: none"> 前時の気づきを共有する。 共生社会の実現における大切なことを考える。 グループで振り返りを共有し、他者の視点に触れることで理解を深める。 交流員の方の考えを聞く。 「共に生きる」とはどういうことだと思うか 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート



		自分の考えをワークシートに記入する。	
6	JICA 出前授業や兵庫県国際交流員との交流を通じて得た学びや気づきを振り返り、「共に生きる」社会の実現に向けて自分ができることを考える。	<ul style="list-style-type: none"> これまでの学習 (JICA 出前授業・国際交流員との交流) を振り返り、印象に残ったことや自分の考えや心情の変化をワークシートに記入する。 グループで振り返りを共有し、他者の視点に触れることで理解を深める。 「共生社会に向けて自分ができること」を一人ひとりが言語化し、短く発表する。 <p>教師が全体をまとめ、今後の学びや生活へのつながりを示す。</p>	<p>これまでの活動を振り返る自作スライド</p> <p>JICA 教材『共につくる私たちの未来』</p> <p>JICA 公式 YouTube「国際協力ってなんだろう？」シリーズ</p> <p>振り返りワークシート(オリジナル)</p>

8. 本時の展開(概略)
 本時のねらい: 国際交流員との交流を通じて、「共に生きる」ことの意味を考え、誰もが共に生きることのできる社会の大切さに気づける。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (10分)	<p>1 前時の交流の振り返りをする。 T「交流員の方のお話を聞き、交流をしてみてください。どんなことに気づきましたか。」「みんなの気づきを見てみよう」</p> <p>・日本は世界の中では生活しやすいと思っていましたが、韓国や中国の方が暮らしやすいと聞いて驚きました。 ・他国と日本との違いが思っていたよりも多かった。 ・日本の不便なところが多く出ているので、そこが日本の課題だと思った。 ・他の国にもいいことがあるし悪いこともあるけど、やっぱり自分の国がいいと思った。</p> <p>T「前時は交流員の方々が日本に住んでみて感じた、日本の良し悪しについて話してください。みなさんは自分の予想と比較して自分の考えを持つことができました。今回は、日本に長く住んでいる我々と、交流員の方々のような海外の方も含め、誰もが共に生きることにどのようなことが必要なのか考えていきます。」</p>	<p>数人の生徒に発表させる。</p> <p>大型モニターに Excel シートを映し出し、いくつか紹介する。4時間目終了後に、紹介する感想を確認しておく。</p> <p>ジブンゴトとして考えられるように、今の自分が何をできるかを考えるように促す。</p>	<p>気づきを記入した Excel シート</p>

本時のねらい: 国際交流員の方たちとの交流を通して、誰もが共に生きることの大切さに気づこう

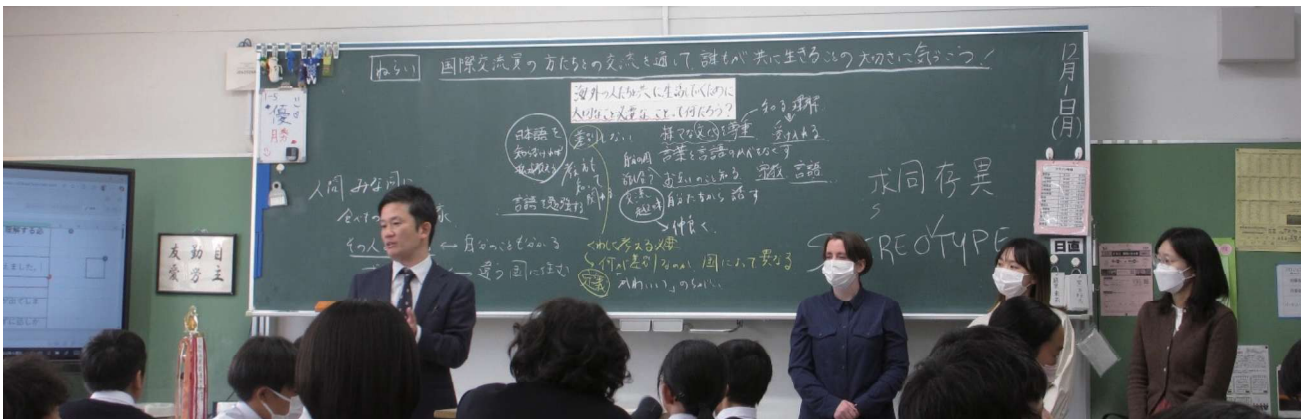
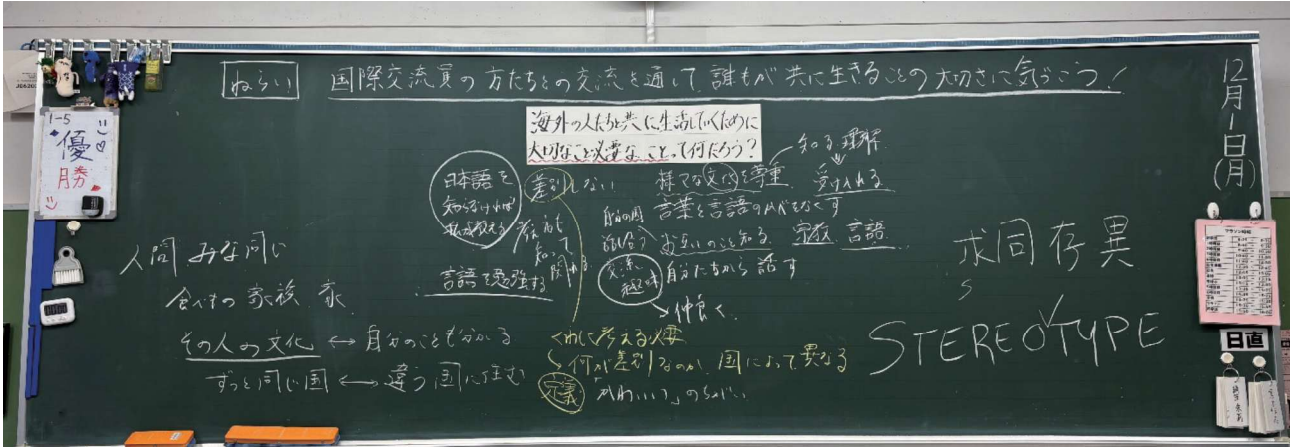
展開1 (20分)	<p>2 共生社会の実現に向けて、意見を交流し、自分の考えを深めていく。</p> <p>T「日本に来られた海外の方と、共に生活していくためにはどのようなことが大切だと思いましたか。自分の考えを Excel シートに記入してください。」</p> <p>・相手の文化を知り、思いやりを持って恥ずかしがらずにちゃんと話す、接する。 ・自分の国の文化も大切だけど、一緒に生活し</p>	<p>・感情面だけでなく「自分にできること」への視点を促す発問を意識する</p> <p>・グループで話し合った内容を踏まえて、自分の考えを記入させる。</p> <p>・教員は「対等」「相互理解」という視点を持つ。 ・切り返し発問で、グループの意見</p>	<p>問いを黒板に掲示する</p> <p>自分の考えを記入するための Excel シート</p>
--------------	---	--	--

<p>展開2 (15分)</p>	<p>ていく人の国の文化をゆっくりでもいいから、受け入れていくことが大事だと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の文化と相手の国独自の文化をしっかりと理解する必要があると思いました。 ・言葉、言語の壁をなくすこと。 ・海外から来た人に日本の事を教えられるように僕たちが日本の事を知らなきゃいけない。 ・みんな同じ人間として接する。 <p>T「グループで意見交流してください。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉と言葉の壁をなくす。 ・違う国だからと差別しないことが大切。 ・様々な言語をもっと勉強する。 ・日本語を知らなければ、私が教える。 <p>3 交流員の方たちの意見や考えを聞く</p> <p>T「それでは今度は、海外から来て日本に住んでいる交流員さんにご意見を聞いてみたいと思います。交流員のみなさんは共に生活していくためにはどのようなことが大切だと思いますか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・求同存異(中国の言葉) ・人間皆同じ。 ・食べ物や家、その人の文化など他国のことを理解することで自分の国のこともよく分かってくる。(違う国に住んでみるとわかる) ・お互いに違う考え方をしても、間違いじゃないと受け止める心が大切だと思う。 ・“みんなと同じ”ではなく、“違っていてもいい”という考え方を持つこと。 ・何が差別なのか、国によって異なる。外見を例にとっても、国によって認識が異なるからこそ、詳しく考える必要がある。 	<p>をつなげたり、広げることで深めていく。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・Excelシートで他の人の意見を参考にしながら意見交流してもよいと伝える。 ・話し合っていることを机間指導で聞き、いくつかのグループを指名して発表させる。 ・教師がファシリテーターとなって進行し、3名の考えや意見を聞く。その際に、生徒の考えについても意見してもらえよう発問する。 ・ポイントとなる言葉を黒板に板書していく。 ・あくまで一個人の意見であるということを抑える。 	
<p>まとめ (5分)</p>	<p>4 授業を振り返る</p> <p>T「今回はみなさんに“生の声”を聞いてもらいたいという思いがあって、実際にゲストの方をお呼びして交流しました。」</p> <p>T「交流員の方の意見を聞いたみなさんは、共に生きるとはどういうことだと思いましたか。振り返りシートに記入してください。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に交流した目的やねらいを簡潔に伝える。 ・次時は今回の振り返りを共有し、自分たちができることについて考えていくことを伝える。 	<p>振り返りシート(自作)</p> 

国際交流員プロフィール

- ・李霞(りか) 中国広東省
- ・李多彬(イダビン) 韓国大邱広域市
- ・Anna Schnell(シューネルアンナ) アメリカ合衆国ワシントン州





9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

「共生とは何か」「自分にできること」など、単元目標に沿った思考の深まりが見られる。(振り返りシート)

異文化や多様な価値観に触れて得た気づきや、交流を通して生まれた自分なりの問いや考え、今後の行動や学びへの意欲につなげることができている。(振り返りシート)

10. 学習方法および外部との連携

【学習方法】

本学習では、生徒が主体的・協働的に学ぶことを重視し、以下の方法を取り入れた。

- ・JICA オンライン出前授業の実施
- ・国際交流員の方たちによる交流型学習
- ・Excel シートを活用した振り返りによる相互参照

【外部との連携】

- ・JICA オンライン出前授業
- ・西宮市政策局市長室秘書課交流チーム
- ・西宮市国際交流協会
- ・兵庫県国際局・国際交流協会

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

- ・兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会「多文化共生・国際理解教育研修会」での実践発表
- ・西宮市教育委員会(国際理解教育部会)との連携

本単元では、国際協力や多文化共生の「本物の」事例に触れることで、生徒の興味関心を高めたいという想いがあった。研修アドバイザーの藤原孝章氏にご紹介いただき、西宮市政策局市長室秘書課交流チームの様な並びに西宮市国際交流協会様、兵庫県国際局・国際交流協会様のお力添えを頂戴し、この度の授業を実施することができた。前半では、JICA 海外協力隊員によるオンライン出前授業を行い、日本人が海外で果たす役割や現地の人々との協働の実態を学ぶことで、国際協力の意義を具体的に理解する機会を提供した。後半では、兵庫県国際交流員(CIR)(中国・韓国・アメリカ出身)をゲストティーチャーとして招き、日本で生活する上での思いや背景を直接聞くことで、異文化理解を「知識」から「体験」へと転換することをねらった。

こうした連携により、教科書では得られない一次情報に触れる機会が生まれ、生徒は「違っていてもいい」という価値

観や「もっと交流したい」という意欲を持つようになった。ゲストを「教える人」ではなく「共に考える仲間」と位置づけ、双方向の対話を重視した。

学習者同士の関係性づくりにも配慮し、個人の意見を Excel シートに記入し、グループで交流する仕組みを取り入れた。この方法により、生徒は他者の考えを参照しながら自分の意見を深めることができ、対話の質が向上した。さらに、JICA 隊員の話を通じて「世界と自分のつながり」を実感し、CIR との生の声を聞く交流を通じて「地域にある異文化」を理解することで、共生社会のあり方を自分事として考える契機となった。異文化理解が「遠い世界」から「身近な現実」へと変わり、共生社会への態度形成につながった。

【自己評価】

12. 苦労した点

当初の指導案では、生徒主体の対話を重視し、ゲストティーチャーとの交流を通じて「共に生きることの大切さ」を深めることをねらいとしていた。しかし、実際の授業ではいくつかの課題が浮かび上がった。

第一に、ICT 環境の不安定さである。指導案ではタブレットや Excel シートを活用し、意見の可視化や共有を通じて学びを深める計画を立てていたが、西宮市のネットワーク環境の不具合により、スムーズな進行が難しい場面があった。このことは、協働的な学びを支える基盤整備の重要性を改めて認識させるものとなった。

第二に、発話のバランスである。指導案では、生徒が主体的に考え、発言する場を確保することを重視していたが、ゲストとの交流を円滑に進めるために教師の補足説明や問い返しが増え、結果として教師の発言比率が当初の予定よりも高くなった。生徒の意見は多く出たものの、さらに深めるためには、教師の介入を最小限にし、ファシリテーターとしての役割に徹する工夫が必要である。

第三に、時間配分の難しさである。指導案では、交流後に「共に生きる」ことを考える話し合いを十分に行うことを想定していたが、実際にはゲストとの対話に時間を要し、深い議論に至る前に授業を終える場面があった。今後は、前半の個人・グループ活動を簡潔にし、交流後の振り返りや再話し合いに重点を置く時間設計が求められる。これらの課題は、国際理解教育の本質である「対話を通じた気づき」をさらに充実させるために重要な点であると考える。

13. 改善点

本時の授業では、指導案で意図した「共に生きることの大切さ」を深める学びを目指したが、実践の中でいくつかの課題が浮かび上がった。まず、話し合いの内容が、中学生の総合的な学習にふさわしい深い思考を引き出すことが難しかった。視点の提示や問いの質を高める工夫が不足していたことが要因である。

次に、既習内容との接続が不十分であった。小学校で国際理解教育を受けているはずであるが、その学びを踏まえた問いや導入ができず、学習の連続性を確保することができていなかった。

さらに、授業が「交流としての国際理解」に偏り、地域課題や現代的な社会背景を扱う視点が弱かった。コンビニの外国人店員や海外志向の変化など、身近なテーマを取り上げる余地を残したことは改善すべき点である。加えて、話し合いの時間は長かったものの、教師の発話が多くなったことで、生徒主体の対話を促すファシリテーションに課題を感じた。これらは、国際理解教育の本質である「対話を通じた気づき」をさらに充実させるための重要な示唆であり、今後は問いの質の向上、時間配分の工夫、そして生徒主体の学びを支える仕組みづくりを意識して取り組みたい。

14. 成果が出た点

本単元の最大の成果は、生徒の意識や態度の変容である。授業前の調査では、海外や異文化に対する興味関心が乏しく、「海外に行ってみよう」と答えた生徒は約 2 割にとどまっていた。しかし、JICA 海外協力隊員の講話や兵庫県国際交流員 (CIR) との交流を通じて、生徒の認識は大きく変化した。授業後の感想には、「海外に行ってみよう」「住んでみたい」「文化を尊重することが大切だと思った」「日本と外国にはそれぞれ良いところがある」「差別をなくすことが大切」など、異文化理解や共生社会への態度形成につながる言葉が多く見られた。

特に、交流を通じて「海外はどことも治安が悪い」という先入観が解消されるなど、「現地の人のお話を聞いてみないと分からない」「お互いの文化を尊重することが大切」という気づきが生まれたことは重要である。また、「韓国に行ってみよう」「バヌアツの人も私たちと同じ人だと思った」など、具体的な国名を挙げて関心を示す記述もあり、国際理解教育の目的である「世界と自分のつながりを実感する」学びが達成されたといえる。

さらに、ICT を活用した意見共有や、ゲストとの双方向の対話により、生徒は自分の考えを言語化し、他者の視点に触れることで思考を深めることができた。これらの成果は、国際理解教育における「体験を通じた学び」の有効性を示すものであり、今後の授業実践においても継続的に取り入れる価値があると強く感じた。

15. 学びの軌跡 (児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

本単元の開始前、生徒の多くは海外や異文化に対する関心が乏しく、「海外に行ってみよう」と答えた生徒は約 2 割に過ぎなかった。しかし、JICA 海外協力隊員の講話や兵庫県国際交流員 (CIR) との交流を通じて、生徒の認識は大きく変化した。授業後の感想には、次のような言葉が並んだ。

[感想はこちら](#)



「海外に行ってみたい」「住んでみたいと思った」

「日本には日本の良いところがあるし、外国には外国の良いところがある。どこの国が良い悪いではなく、お互いの文化を尊重し、差別をなくすことが大切だと思った」

「海外は治安が悪いという先入観があったけど、話を聞いて海外にも良いところがたくさんあることが分かった」

「現地の人話を聞いてみないと分からないと改めて思った」

これらの記述から、生徒が「海外＝遠い存在」という認識を改め、異文化を尊重する態度や共生社会への意識を育んだことが読み取れる。また、「韓国に行ってみたい」「バヌアツの人も私たちと同じ人だと思った」など、具体的な国名を挙げて関心を示す記述もあり、学びが実感を伴って広がったことが分かる。

さらに、「日本の当たり前は他の国では当たり前ではない」「お互いの違いを理解することが大切」という言葉は、単なる知識習得にとどまらず、価値観の転換が起きている証拠である。交流を通じて「共に生きる」ことを考え、差別や偏見をなくす必要性に気づいたことは、国際理解教育の本質に迫る学びであった。

このように、生徒の言葉からは、興味関心の芽生え → 価値観の変容 → 行動意欲の形成という学びの軌跡が明確に読み取れる。今後は、この変容を一過性に終わらせず、地域課題や世界の課題と結びつけながら、持続可能な社会の創り手を育む学びへと発展させたい。

16. 授業者による自由記述

私は、国際理解教育は「与えられるもの」ではなく、子どもたち自身が「学びたい」と感じるものであるべきだと考えています。初任校では、国際理解教育が例年通りの形で繰り返される現状に疑問を持たずに過ごしていました。しかし、ある授業を通して自分自身の国際理解への無知を痛感し、「世界に触れた上で教壇に立つべきだ」と強く思うようになりました。その思いから、文部科学省の在外教育施設派遣制度に応募し、ロンドン日本人学校で3年間勤務しました。

ロンドンでの実践では、SDGsをテーマにしたジュニア EXPO プログラムに取り組み、子どもたちが「いのち輝く未来社会」を考える場を創りました。難民問題を扱った生徒の発表をきっかけに、国連 UNHCR 協会と連携し、実際に専門家の話を聞く機会を実現したことは、私にとって大きな転機でした。この経験から、国際理解教育は「教えるもの」ではなく、子どもたちが主体的に学びを広げる環境を整えることが重要だと確信しました。

今回の単元でも、海外や異文化への関心が乏しかった生徒たちが、JICA 海外協力隊員や兵庫県国際交流員との交流を通じて、「海外に行ってみたい」「文化を尊重することが大切だと思った」と語る姿に、国際理解教育の力を改めて感じました。今後は、この学びを一過性の体験に終わらせず、地域課題や世界の課題を結びつけながら、持続可能な社会の創り手を育む授業を構築していきたいと考えています。

私は、校内の国際理解教育主任として、今回の研修で得た知見を積極的に共有し、現場にある「例年通り」という風潮を変革していきたいと思っています。そして、「教室から世界へ～未来を共に創るチカラを育む～」を体現する授業を、子どもたちと共に創り続けたいと思います。

最後に、本研修に参加させていただけたことに心から感謝申し上げます。アドバイザーの先生方からいただいた専門的なご助言は、授業改善の方向性を明確にする大きな支えとなりました。特に、授業後にいただいた「視点の提示」「時間配分」「問いの質」など、専門的なご助言を今後の実践に必ず生かしていきます。

また、運営スタッフの皆様の丁寧なサポートにより、安心して学びを深めることができました。この学びを現場に還元し、校外で国際理解教育の重要性を広めていくことを、今後の使命として取り組んでまいります。

【参考資料】

- ・グローバル時代の国際理解教育～実践と理論をつなぐ～
日本国際理解教育学会 編著 2010年発行 明石図書 出版
- ・国際理解教育～地域市民を育てる授業と構想～
大津和子 著 1992年発行 国土社 出版
- ・新版シミュレーション教材「ひょうたん島問題」
藤原孝章 著 2008年発行 明石書店 出版
- ・外国人労働者問題をどう教えるか
藤原孝章 著 1994年発行 明石書店 出版
- ・国際理解～重要用語 300 の基礎知識～
大津和子 溝上泰 編集 2000年発行 明治図書 出版
- ・多文化教育の授業開発と実践～多様性の尊重と社会正義の実現を目指して～
中澤純一 著 2023年発行 明石書店 出版
- ・JICA 公式サイト「出前授業」紹介ページ
- ・JICA 地球ひろば「教材を探す」より『つながる世界と日本』冊子教材
- ・JICA 公式 YouTube「2022 年度移住史・多文化理解オンライン講座 ～歴史から『他者』を考える～」